

関における相関係数は、第4表に示す通り、歯列弓及び口蓋において、各々その長径、幅径、長幅示数、幅示数相互間に顕著な正相関々係が認められ、且歯列弓形態の長狭型のものは高い口蓋を有し、短広型のもの程その口蓋は低い。

主要文献

- ①藤田恒太郎 歯の解剖学。東京。1949。 ②G. V. Black, Special Dental Pathology 1915. ③五十嵐 信一 顔面頭蓋と硬口蓋との形状並に大きさの關係。金沢医科大学解剖学教室業績。第22冊。29~46, 1936。
④…………… 脳頭蓋—硬口蓋との形状並に大きさの關係。金沢医科大学解剖学教室業績。第22冊。12~28, 1936。 ⑤Körner, O. Untersuchungen über Wachstumsstörung und Missgestaltung des Oberkiefers und des Nasengerüsts infolge von Behinderung der Nasenathmung, Leipzig. 1891.※ ⑥Martin, R. Lehrbuch der Anthropologie, 2. Aufl, Jena. 1928。
⑦Murakami, K. Die Knöchernen Gaumen dre Japaner. Arbeit. aus dem anat. Institut der Kais. -Japan. Universität zu Sendai. 13, 1928.※ ⑧Nakamura, M. The osseous palate in the Japanese population. Kyushu Memors of Medicine Sciences. 3, 2: 161~182, 1952。 ⑨奥家広一 顎発育異常と口蓋形態との關係について(特に下顎近心咬合について)歯科学雑誌 3, 1: 27~33, 1946。 ⑩酒井琢朗 日本人歯列弓の形態並びに歯列弓各部の關係について(信州医学雑誌。4, 2: 1955に発表予定) ⑪Schmidt, M. Die Krankheiten der oberen Luftwege. 1894.※ ⑫Siebenmann, F. Über adenoiden Habitus und Leptoprosopie, sowie über das kurze Septum der Chamaeprosopien. Münch. med. Wochenschr. No. 36, 1897.※ ⑬柴田信 歯牙形態学。東京。1941。 ⑭須藤高文 本邦人骨口蓋の解剖学的研究。慈恵解剖学教室業績集。8冊 1952。 ※印は五十嵐による。

On the Form of Palate and the Relations of Various Parts of Dental Arch and Palate in the Japanese

Takuro Sakai

Department of Anatomy, Faculty of Medicine,
Shinshu University
(Director: Prof. M. Suzuki)

The author investigated the relations of the form and size between the various parts of dental arch and palate with the method of plaster cast from the 109 Japanese males.

The results are summarized as follows:

- 1) As regards the forms of palate, round form is far more frequently found than V, flat and wave form in frontal section.
- 2) The measurement values and indices of the palate are shown in Table 2.
- 3) The coefficient of correlation among the measurement values and indices of palate are shown in Table 3. In the various parts of palate, there is a positive correlation between the length and height. There is a negative correlation between the length-breadth and breadth-height indices in other words leptostaphylin is hypsistaphylic. But in other items any significant correlations can not be recognized.
- 4) The coefficient of correlation among the measurement values and indices of dental arch and palate are shown in Table 4. In the length, breadth, length-breadth index and breadth index, there is a remarkable positive correlation between dental arch and palate.

蛙胃粘膜上皮及び胃腺細胞の増殖について

昭和30年6月16日受付

信州大学医学部第一解剖学教室(指導 尾持教授)

春 原 幸 雄

緒 言

一般に上皮は盛んに絶えず脱落して新しい細胞と更新されているのであるが、我々が日常顕微鏡標本を観察しても、上皮が相当に脱落するであろうと思われる部位であつても、切片標本に於ては有糸核分裂像を少数しか発見する事が出来ない。さて有糸核分裂は無糸核分裂に比較して核内の複雑なる変化と時間とを要す

る事は衆知の事実であつて、上皮の更新が有糸核分裂のみによつて行われているとは思ふに難く、むしろ核の内部構造の著明な変化を起さずに短時間に完了される無糸核分裂が多数行われて良い筈である。私はトノサマ蛙の胃の粘膜上皮に於て細胞の増殖状態を研究したところ興味ある成績を得たので、更に胃腺細胞の分裂をも検索し、従来切片標本に於て少数しか見ら

れなかつた無糸核分裂像を粘膜上皮と胃腺細胞とに多数発見する事が出来、しかもその増殖状態をも詳細に究明し得たので茲に報告する次第である。

材料並に研究方法

材料は成熟したトノサマ蛙20匹を使用した。蛙は冬季を避け胃の粘膜が機械的並に化学的刺戟を受け、胃腺の活動が盛んな状態であると思われる6月から9月までに採集したものである。

先ず蛙の腹壁を型の如く開いて胃を露出しこれを切り出すとき0.65%の生理的食塩水中に之を浸し、鋏にて縦切して其の内容物を洗い落すのであるが、此の際粘膜面を損傷せぬ様に充分注意をする事が必要である。汚物がなくなつたら、もう一度新しい食塩水で良くすすぎ胃底部の一部を取り型の如くパラフィンにて包埋し切片標本(1)を作製してヘマトキシリン、エオジンにて重染色する。胃底部の残部はRanvier氏ノアルコール中に浸すのであるが、其の温度は20°C位が適當である。Ranvier氏アルコール中に約3時間位浸した後に、液を良く振盪すると胃片から上皮及び胃腺群が集団をなして脱落するのが肉眼で良くわかるから、再度振盪したる後胃の残塊を取り出すと色を呈する様になつて居る。此のような状態になると粘膜下組織迄は大体脱落しているのである。此の胃片を取り出し、パラフィンの切片標本(2)を作る。アルコール液は、更に良く振盪したる後液が充分均質に濁濁してから分離標本を作製した。

一般に細胞増殖の研究にはパラフィンの包埋の後に切片として観察する。私も型の如く胃底部の切片標本を作製して観察したが、5 μ 位に薄く切つても細胞の核が互に重なり合うので見難い事が多く、細胞の境界を明瞭に決定する事が出来ない様な場合も屢々ある。即ち無糸核分裂が行われつゝあつても、又無糸核分裂の結果、一つの細胞に二核又はそれ以上の多核を有する状態が有つても、明瞭に之を認める事が困難な場合が多い。又切片で観察される細胞は必ずしも固有の細胞の全形を示すものではないために無糸核分裂に於ける胞体の分裂状態を究明するには極めて不便であり困難である。此の点当教室で行つゝある分離細胞永久標本作製法は上述の缺点を補ひ無糸核分裂像の詳細なる究明に便利である。その詳細については作州医学雑誌第1巻第1号に報告されているが以下簡単に分離標本の作製法を述べる事にする。

前述の分離された細胞を含むRanvier氏アルコール液を遠心分離して細胞を沈澱させ、沈澱と、その三倍量のアルコールだけを残して後は捨て、了。次にアラビヤゴム末0.7gr、水1.0c.c.、卵白3.0c.c.よりなる固着液をつくり、沈澱に一滴を加えよく振盪する。此の混合液を載せガラスの上に塗抹し、軽く乾燥したら

Zenker氏液にて固定し型の如くヘマトキシリンで染色し、脱水後バルサムにて封入するのである。

自家所見及び考按

蛙の胃壁は粘膜、粘膜下組織、筋層、漿膜よりなつて居る。切片標本(1)を観察するに、単層柱状の上皮が一行に皺襞をなし、胃小区の細胞は丈が高いが、胃小窩部に近づくにつれて丈が低くなつて居る。胃小窩部附近では補充細胞を認める。核は細胞の高さの下方に存し楕円形をなし、又細胞の遊離縁には、小皮縁を有する。核は隣接のものが互に重り合つて居るため個々の細胞体と、それに属する核とを明確に区別する事が屢々困難であつた。皺襞の中央部より先端に至る間の上皮細胞に無糸核分裂像を少数認めたが、但しこれらの像は次に述べるが如き状態のものだけに過ぎなかつた。即ち無糸核分裂を終了し、細胞体の分裂が未だ始まらない時期のもの、換言すれば、一胞体内に二個の核を有するものであつて、他の時期のものは認める事が出来なかつた。胃小窩部附近に於ては、無糸核分裂像を認めない。無糸核分裂像の中で斯くの如き一定時期の像しか発見し難き理由としては、次の如き理由があると考えられる。即ち切片標本の性質上一個の細胞は、その境界が明瞭でなく、検鏡に際し得られる細胞像は必ずしも完全なる一個の細胞像でないため、無糸核分裂の如く核の内部構造に著明なる変化を起すことなしに行われる現象では屢々その判定に困難を伴ひ、且つ又胞体の分裂過程を追及する事も一層至難であると言わねばならない。だから当然存在す可き所見も発見されない場合が屢々有り得る。斯く考えれば上述の無糸核分裂像が少数であつても不思議ではない。尚無糸核分裂像の多少については後述するが、分離標本では切片標本に比して遙かに多数の無糸核分裂像を発見し得たのである。有糸核分裂像は胃小窩部附近に於て発見された。これは無糸核分裂像と違つて核の変化が著明であるため明瞭に認め得るが、其の数は比較的小数であつて、時期としては中期、後期のものが主として認められた。

次に胃腺は多数の腺細胞が存在し、胃小窩に開口して居る。此の腺細胞に介入するごとく粘液細胞が散在して居る。これは温血動物に於ける旁細胞(壁細胞)に相当するものであつて、多角形又は円形の大きな細胞である。核は円形又は楕円形にして細胞底に近く存する。原形質は暗調であり顆粒が多い。腺細胞は立方状で核は楕円形にして比較的大きく中央部か或は底部に近く存し明調を呈し温血動物の如く主細胞、副細胞の区別はない。

粘液細胞には、無糸核分裂像を少数認めたが、上皮の場合に於けると同様な状態のものだけしか認める事が出来なかつた。粘液細胞の無糸核分裂像については

春原論文附圖 1

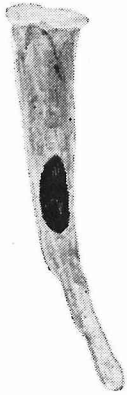


Fig. 1.



Fig. 2.



Fig. 3.



Fig. 4.

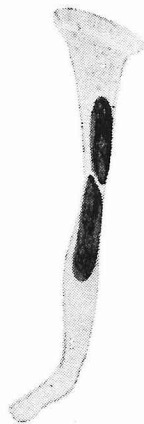


Fig. 5.

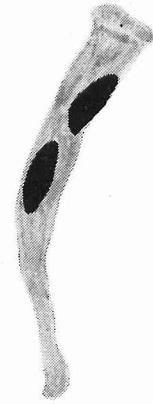


Fig. 6.



Fig. 7.



Fig. 8.

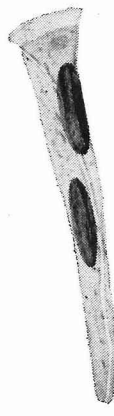


Fig. 9.



Fig. 10.

春原論文附圖 2

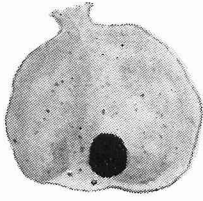


Fig. 11.

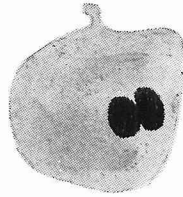


Fig. 12.



Fig. 13.

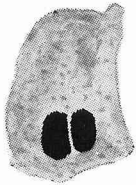


Fig. 14.

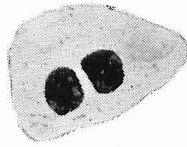


Fig. 15.

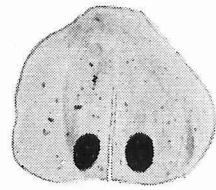


Fig. 16.

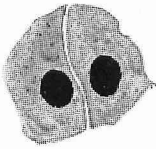


Fig. 17.



Fig. 18.

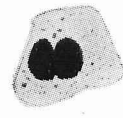


Fig. 19.

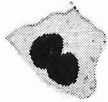


Fig. 20.



Fig. 21.



Fig. 22.

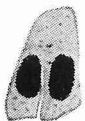


Fig. 23.



Fig. 24.



Fig. 25.

後述するが、此の細胞は粘膜上皮、胃腺を通じて最も無糸核分裂を盛んに行う細胞であつて分離標本に於ては、接眼15×、対物鏡10位の弱拡大のもとに検鏡しても常に2或は4個位は無糸核分裂像を容易に発見し得るのであるが、やはり切片標本では、前述の如き理由により発見し難いのであらうと思われる。有糸核分裂像は粘液細胞には認めなかつた。

腺細胞の無糸核分裂像は上層部よりは深部の方に散在して認められたが之も勿論小数であつて、有糸核分裂像は胃小窩に近く、腺開口部附近に明瞭に小数認められた。

次に分離標本の所見を述べる事にするが、その前に切片標本(2)を観察すると上皮と粘膜固有層は完全に脱落して失われていて、筋層以下を認めるのみである。即ち分離標本に於ては、上述の脱落部の細胞がみられるわけであつて上皮、粘液細胞、腺細胞を認める。何れの細胞も無糸核分裂像を多数に認めるが、有糸核分裂像は小数しか認める事が出来ない。但し粘液細胞で無糸核分裂像は発見しなかつたが無糸核分裂像を呈せるものは、その分泌孔を閉じており細胞本来の機能である粘液の排出を停止している事がよくわかる。之に反して核が静止期の状態にあるものは分泌孔が広く開いている。此の状態も切片標本よりは明瞭にしかも容易に観察する事が出来るのであつて、有糸核分裂像は切片標本でも、分離標本でもその数は大差なく小数であり、無糸核分裂像は実に多数分離標本に於ては発見する事が出来る。此の理由は、無糸核分裂は有糸核分裂と異り分裂に要する時間が短いのと、核自体の染色上、形態上の変化が極く軽微なために切片標本では核が互に重り合つているから無糸核分裂の如く瞬間の像は検鏡し難いのである。しかしながら細胞体の分裂は未だ起らないが、既に無糸核分裂のみは終了しているものは、各細胞に於て切片標本に於ても認める事が出来た。此の事は分離標本に於ても同様であつて多数の無糸核分裂像中此の状態のものが最も多く発見されているのである。此の事実は無糸核分裂中で此の時期が比較的ゆるやかに経過し核も安定した状態を物語つていると考えられる。

以下無糸核分裂像に関して分離標本により判明した分裂の各過程を上皮、粘液細胞、腺細胞に分けて順序に従つて図により説明する事にする。尚図はすべて器械的筒長160mmの顕微鏡(接眼15×、対物40)にアッペ氏描画装置を装着して机上にて描いたものである。

上皮 (Fig. 1~Fig. 10)

Fig. 1. これは静止期に於ける上皮で核は楕円形で、細胞の中央よりやや下にあり胞体の内半は明調、外半はやや暗調を帯びている。

Fig. 2. 核にくびれを生じたもので、核の内部構造

は静止期のものにくらべて大した変化がない。くびれた相互の核は染色質を以て連つている。此の様な状態は非常に稀にしか認められないが、これは此の時期を非常に速かに経過してしまふと考えられる。

Fig. 3. 分裂した核相互間に境界を生じた状態で核は完全に分裂しているが、尙互に接着している。

Fig. 4. 娘核の間に明瞭に間隙を生じた状態である。此の場合興味のある事は離断面が双物で切つた如く直線的になつてゐる。此の時期のものは比較的によく見られるから、時間的にも、ゆつくり経過していると思われる。

Fig. 5. 娘核間の相対する面は直線的であり此の点とは同様であるが、此の線が細胞の横軸より斜になつてゐる。即ち娘核の外側が細胞の縦軸に沿つてやゝ延びて来ている。此の時期のものは多く認められる。

Fig. 6. 分裂した二核が一層離れ娘核の相対する面は、もはや直線的ではなく円味を帯びて来ているが、娘核は尙同一細胞内にある。

Fig. 7. 娘核が更にその距離を増し、核の長軸か、或は長軸の1/2位まで離れる。此の状態のものは非常に少ない。

Fig. 8. 胞体の分割が始まつたところである。胞体の分裂線は細胞の下部から始まり娘核の間を通過している。此の時期のものは非常に少ない。これは此の時期が速かに経過すると考えられるが、他面細胞も非常に不安定な状態にあるから、分離標本作製時に人工的に分割されてしまふとも言える。恐らく此の二つの事が原因と考えられる。

Fig. 9. 細胞体の分裂が完了したもので、此の状態のものは更に稀であるが、その理由はFig. 8.に述べたのと全く同一であると考えられる。

Fig. 10. 有糸核分裂像であるが、無糸核分裂像に比較すればその数は問題にならない位小数である。

次に粘液細胞について説明する。

粘液細胞 (Fig. 11~Fig. 17)

Fig. 11. これは静止期の粘液細胞であつて分泌孔が開いている。その反対側、基底部に近く楕円形の核が存する。細胞は多角形よりはむしろ円形に近く暗調である。

Fig. 12. 核の横軸にくびれを生じたもので、縦軸は細胞底と平行している。此の状態のものは非常に少ないが、その理由は上皮の場合と全く同一と考えられる。

Fig. 13. 分裂した核相互間に境界を生じたものである。核は互に接着してゐて、Fig. 12.の状態のものよりはやゝ多く見られる。

Fig. 14. 分裂した二核の間に完全なる間隙が生じたもの。核の相対する面は上皮に於けると同様直線にな

している。此の期のものは弱拡大で検鏡しても一視野に2乃至4個位発見する事が屢々あるが、切片標本では稀にしか認める事が出来ないのである。

Fig. 15. 分裂した二核が更に離れたもので、其の間隔は、核の短軸の長さか或はその $\frac{1}{2}$ 長位である。此の期のものは多く見られる。

Fig. 16. 核の基底部から兩娘核間を通つて分泌孔に向い胞体の分裂線を生じたもので、小数しか認められない。

Fig. 17. 胞体の分裂が完了せるもの。これも極めて小数である。此の理由、経過時間共に屢々上述したから省略する。

最後に腺細胞の無糸核分裂も上述の粘液細胞と同様であるから簡単に説明する。

腺細胞 (Fig. 18~Fig. 25)

Fig. 18. 静止期のもので核は中央よりやや下方に存し楕円形である。

Fig. 19. 核にくびれを生じたもので小数しか認められない。

Fig. 20. 互に核が分れているが尙接合しているもの。同じく小数しか認められない。

Fig. 21. 核が接合線に沿つて刃物で切つた如く離断されたもので、分れた核相互の間には間隙を認める事が出来る。此の様な像は相当に多数認められる。

Fig. 22. 核の短軸の $\frac{1}{2}$ 長位の間隔を生じた娘核が見られる。

Fig. 23. 基底部から娘核間を通り胞体の分裂が始まつたものである。

Fig. 24. 胞体の分裂を完了せるものである。Fig. 23, Fig. 24. は共に小数しか認める事が出来なかつた。

Fig. 25. 腺細胞の有糸核分裂像を示す。有糸核分裂像は比較的小数しか認めることはできない。

結 語

結論として無糸核分裂の数は、有糸核分裂数に比べて分離標本では非常に多い事が判る。特に粘液細胞に於ては此の現象が著明で切片標本と対照すると、無糸核分裂像が余りにも多いので驚く位である。

有糸核分裂は上皮は胃小窩部、腺細胞は腺頸部に於て小数認められるが、他の部では殆んど認められないのであつて上皮も皺襞の中央部より上方で無糸核分裂を認める。此の事は絶えず機械的刺戟を受けている皺襞の上部では、短時間に分裂を完了し得る無糸核分裂によつて更新されていると考えられる。胃小窩部は上皮の丈が低く細胞の形態から考えても幼若であつて、有糸核分裂像を此の附近に認めると云う事は、両者の間に何か因果関係があるように思われる。胃腺の増殖は大部分が無糸核分裂によつて行われている事も分離標本によつて明らかになつたわけで、有糸核分裂像は

僅に腺頸部に於て小数認め得るに過ぎない。此の事は Child 及び Patterson の説と一致している。即ち有糸核分裂と無糸核分裂とは共存し得る。又無糸核分裂は急速なる成長を必要とするところに起るとの両氏の主張を一応裏付けるものとも云えよう。

尙無糸核分裂の過程をみるに核がくびれ次に娘核を形成するがその際離断した面が餅をちぎつた如くにはならないで刃物で切つたように直線的になるのは興味深い。何となれば成書には無糸核分裂の際に娘核は互に水飴を引き離すように引き延ばされると記載されているからである。次いで分裂した核は移動して細胞の種類によつて多少の差はあるが一定距離だけ移動すると停止して、胞体の分裂が起る。胞体の分裂は上皮では下部から縦裂し娘核間を通り斜に分かれ、胃腺細胞は底部から娘核間を通り直線的に二分される。分裂に要する時間は核がくびれる時期、核が分裂して未だ接合している時期、胞体の分裂が開始される時期は早く経過し、核が僅に離れている時期は遅く経過する。但し核が移動を完了するまでの時間は、上皮では早く腺細胞では遅い。

以上の所見は蛙での実験であるが、ラッテ、及び人間の胃に於ても全く同様の結果を得たが他の機会に報告する事にする。

拙筆するに当り絶大なる御指導、御校閲を賜りました尾持教授並に御協力下さつた教室員諸氏に感謝の意を表します。

主要文献

- ①C. M. Child: Amitosis as a factor in normal and regulatory growth. *Anat. Anz.* 30. 1907 (zit. nach Möllendorff). ②E. Gaupp: *Anatomie des Frosches.* ③Rudolf Krause: *Mikrosk. Anatomie d. Wirbeltiere in Einzeldarstellungen, Amphibien.* 1923. ④黒津 徹行: 解剖学雑誌, 4, 11. ⑤森於菟, 吉岡俊亮: 総合動物学, 蛙. ⑥Möllendorff: *Handb. d. mikrosk. Anat. d. Menschen.* 1. 2. ⑦Möllendorff: *Handb. d. mikrosk. Anat. d. Menschen.* 2, 1. ⑧Möllendorff: *Handb. d. mikrosk. Anat. d. Menschen.* 5, 2. ⑨尾持昌次, 小島徹, 井上智弘: 我等の分離上皮永久標本作製法. 信州医誌, 1, 1. ⑩J. Th. Patterson: Amitosis the pigeon egg. *Anat. Anz.* 32. 1908. (zit. nach Möllendorff). ⑪小島徹: 蛙小腸円柱上皮の増殖に関する研究, 信州大学紀要, 2.

Study on the Proliferation of Gastric Epithelia and Glandular Cells in the Frog

Yukio Sunohara

Department of Anatomy, Faculty of Medicine,
Shinshu University
(Director: Prof. Sh. Omochi)

The sections and isolated preparations of the materials were examined and the results obtained are as follows:

1. Amitosis as well as mitosis are found in the proliferation of the gastric epithelia.
2. In the amitosis the nucleus constricts at first in the middle of the epithelium and then it splits in two separate parts as if it was cut by an edged tool. The daughter nuclei shifts slantwise to the surface

of the epithelium and then the cell body divides into two in the same way.

3. The glandular cells in the stomach of the frog consist of mucous cells and so-called gastric glandular cells. The mucous cells increase in the way of amitosis and the so-called gastric glandular cells in the way of mitosis as well as amitosis.

4. In the amitosis of the gastric glandular cells the nucleus constricts and divides into two parts as in the gastric epithelium, and the cell body divides almost straight and parallel to the split surface of the nucleus.

胆道疾患の術後障害に関する経験と考察

昭和30年6月13日受付

信州大学医学部丸田外科教室

降旗力男 飯田太

胆道疾患の治療法は内科，外科の境域問題として古くから論議的となつて来たのであるが，最近では手術手技の進歩と化学療法の発達により観血的療法が次第に多くなりつゝある。しかしながら胆道疾患の手術後には時として思わぬ障害に遭遇することがあるから，これら障害の原因を究明しその予防対策を講ずることは胆道疾患の外科臨床に極めて重要な問題である。

吾々は丸田外科教室に於て胆道手術後の障害を訴える患者3例を再手術する経験を得たのでその所見を報告し，併せて術後障害の発生原因に就て二，三の考察を加えたいと思う。

症 例

第1例 松沢某，29才，女性。

昭和26年12月17日胆石症の診断のもとに当科に於て胆嚢剔除と胆管切開を受け，胆嚢から結石3ヶ，總胆管から蛔虫のミイラ化した屍体を採り出した。まもなく治癒退院し家事に従事していた所，昭和28年10月4日突然上腹部の激痛を覚え以後毎日の如く疼痛発作あり，次いで発熱，黄疸を認めるようになったので同年11月30日当科に於て再手術を受けた。

再手術所見：開腹すると肝下面の胆嚢床と思われる附近には胃幽門部前庭と大綱が癒着しており總胆管を見出し得ない。そこで癒着を剝離して總胆管を露出してみると，示指頭大の結石が總胆管末端に嵌入していることが判明した。よつて胆管切開を行つて結石を除去し，胃が再び肝下面と癒着するのを防ぐために肝下面に大綱を挿入して手術を終えた。

本例はその後全く健康を恢復したことから本例の愁訴は結石によるものと考えられる。

第2例 堀金某，58才，女性。

昭和28年5月4日胆石症の診断のもとに当科に於て胆嚢剔除と胆管切開を受け，總胆管から拇指頭大の結石2ヶを採り出した。6月3日治癒退院したが，6月14日夕刻より悪寒と共に右季肋下部の鈍痛が現われ更に6月26日頃より相次いで悪寒，発熱を訴えるようになり，且つ黄疸が現われて来たので7月13日当科に於て再手術を受けた。

再手術所見：肝下面の胆嚢床附近には大綱，胃幽門部，十二指腸の一部が強く癒着している。これらの癒着を丁寧に剝離したかなお胆管の状況の詳細は不明である。結局愁訴の原因を確め得ないまま手術を終えたが，手術後は疼痛，黄疸，発熱等は消散し，術後39日目に治癒退院した。

本例はその後今日に至るまで健康を保持していることから，本例の術後愁訴の原因は癒着による胆管の通過障害が主たるものであろうと推測される。

第3例 田中某，73才，男性。

昭和27年5月4日胆石症と云うことで某病院で手術を受けた。ところが凡そ6ヶ月を経過した頃から時々上腹部に強い疼痛発作を訴え，更に悪心，嘔吐を伴うようになった。種々内科的治療を受けていたが一向に軽快しないので，再手術の目的を以つて昭和28年9月1日当科に入院した。

再手術所見：前回の手術創癒痕に沿つて皮切を加え